

曠野

堀辰雄

青空文庫

忘れぬる君はなかなかつらからで

いままで生ける身をぞ恨むる

拾遺集

一

そのころ西の京の六条のほとりになかつかさのたいふ中務大輔なにかしなにがしという
 人が住まっていた。むかしかたぎ昔氣質むかしかたぎの人で、世の中からは忘れられてし
 まったように、親譲りの、松の木のおおい、大きな屋形の、住み
 古した西にしの対たいに、老妻と一しよに、一人の娘をいづく鍾愛いづくしみながら、

もの静かな朝夕を過ごしていた。

ようや 漸くその一人娘がおとなびて来ると、ふた親は自分等のおいさき生先

の少ないことを考えて、自分等のほかには頼りにするものがない

娘の行末を案じ、いろいろ種々いい寄つて来るものうちから、或兵ひょう

えのすけ衛佐を選んでそれに娘をめあわせた。ふた親の心になつた

その若者は、何もかもよく出来た人柄だつた上、その娘の美しさに夢中になつてしまつてゐることは、はた目にもあきらかだつた。そうしてそれからの二三年がほどというものは、誰にとつても、何もいふところのない月日だつた。

が、そうやって世の中から殆ど隔絶してゐるうちに、その中務大輔のところでは暮らし向きの悪くなつてゆく一方であることは、

毎日女のもとに通つて来る婿むこにも漸くはつきりと分かるようになった。そのなかでは、男だけは以前と変わらずに手厚いもてなしを受けてはいた。それはかえつて男には心苦しかった。が、女との語らひは深まる一方だったので、男はその女のもとをばもはや離れがたく思うようになっていた。

ところが、或年の冬、中務大輔は俄にわかに煩わづいについて亡き人の数に入つた。それから引きつづいて女の母もそのあとを追つた。女は悲歎なげきのなかに一人きりに取り残されて、全く途方に暮れずにはいられなかつた。勿論、男は相変らず夜毎に来て、そういう女をいたわり尽してはくれた。だが、世の中を知らない二人だけでは、すべてのことがいよいよ思うにまかせなくなつて来ることは為方しかた

がなかった。毎日宮仕に出てゆく男のためにもそれまでのように支度を調えることも出来悪できにくかった。それがことに女には苦しかったけれども、どうすることもその力には及ばなかった。

再び春の立ち返った或夕方、女は端近くにいた夫を前にして、この日頃思いつめていたことを口にする決心が漸やつとそのときついたように、こんなことを言い出した。

「わたくし達もこの儘ままこうして暮らして居りましては、あなた様のおためではないのが漸つとはつきりと分つて参りました。父母のおりました間は、それでもまだ何かとお支度などもお調べしてさし上げられておりました。けれども、こう何かと不如意になつて来ましては、それも思うにまかせなくなり、お出仕の折などに

さぞ見苦しいお思いもなされることがおありでございましょう。ほんとうに私のことなどは構いませぬから、どうぞあなた様のお為めになるようになすつて下さいませ。」

男はじつと黙つて聞いていた。それから急に女を遮つた。「ではこの己おれにどうせよといわれるのか。」

「ときどきわたくしのが可哀そうにお思ひになりましたなら——」女は切なげに返事をした。「余所よそへいらしついても、その折にはどうぞいつでも入らつして下さいませ。どうしていまの儘では、見苦しい思ひをなさらずに宮仕などがお出来になれましよう。」

男はしばらく目をつぶつて聞いていた。それから急に男は女の

ほうへ目を上げ、素気ないほどきつぱりと言った。

「この己にこの儘おまえを置きざりにして往かれると思うのか。」
それきりで、男はわざと冷やかそうに顔をそむけ、破れた築土ついでじのうえに葎むぐらがやさしい若葉を生やしかけているのを、そのときはじめて気がついたように見やっていた。

やがて女の漸つところえていたような忍び泣きが急にはげしいおえつ嗚咽おえつに変わっていった。……

男は、そうやって女のほうから別れ話をもち出されてからも、一日も欠かさず女のもとに来ながら、以前とはすこしも変らないように女と暮らしていた。しかしだんだん女の家から召使いの男

女の数も乏しくなり、築土なども破れがちになって来、家に伝わった立派な調度などもいつか一つずつ失われてゆき出しているのが、男の目にもいつまでも分らないはずはなかった。男の様子が昔から見るとよほど変ってきて、以前よりか一層寡黙むくちになりだしたように見えたのは、それから程経てのことだった。しかし男はその様子がそう少し変っただけで、女をいよいよいたわり尽すようにしていた。それが逢う毎に女にはたまらなく思われて、どうしたらいいのか、ただもうあぐね果てるばかりだった。

とうとうまた、或夕方、女はこらえかねたように言った。

「いつまでもこうしてわたくしと一緒にいて下さるのは、わたくしは嬉しがらなくてはならないのですが、どうもそれ以上に心苦

しくてなりませぬ。わたくしはこうしてあなたのお傍に居りましても、あなたのお窠やっれになつたお姿を見ることが出来ませぬのみならず、この頃あなた様はわたくしに隠して、何かお考えになつていらつしやるのでしよう。なぜそれをわたくしに言つては下さらぬのです。」

男は物を言わずに、女をしばらく見ていた。

「己がおまえに隠して考えごとなどをしていゝるものか」と男は何か言いにくそうに口をきいた。「おまえが自分のことに構わずに、己のことばかり構おうとしているのが己には窮屈でならないのだ。己だつて、もう少ししたら、どうにかなるだろう。そうすれば、おまえ一人位はどうにでもしてやれるのだ。それまで、いま少し、

辛抱していてくれ。」

男はそう言ながら、ひと時、いかにもいたいたしそうな目つきで女を見た。しかし女はいつかそこに袖を顔にして泣き伏していた。男はしげしげと女の波うっている黒髪を見ていた。それから自分も急に目をそらせて、ふいと袖を顔にもっていった。

男がその女の家姿を見せなくなったのは、それから何日もたたないうちだった。

二

男が黙ってふいに立ち去ってから、それでも女はなお男を心待

ちにしながら、幾人かの召使いを相手に、さびしい、便りない暮らしを続けていた。が、それきり男からは絶えて消息さえもなかった。女にとつては、それは自分から望んだこととはいえ、たまらなく不安だった。待つことの苦しみ、——何物も、それを紛^{まぎ}らせてはくれなかった。それでも女はまだしもそのなかに一種の満足を見いだし得た。——だが、いつまで立つても、男のかえつて来るあてのないことが分かつて来ると、わずかに残っていた召使いも誰からともなく暇をとり出し、みな散り散りに立ち去つて往つた。

一年ばかりのあとには、女のもとにはもう幼い童^{わらわ}が一人しか残っていないかった。その間に、寝^{しんでん}殿は跡方もなくなり、庭の奥に

植わっていた古い松の木もいつか伐り取られ、草ばかり生い茂つて、いつのまにか葎むぐらのからみついた門などはもう開らなくなっていた。そうして築土ついでじのくずれがいよいよひどくなり、ときおり何かの花などを手にした裸か足の童がいまは其処から勝手に出は入りしている様子だった。

なかば傾いた西にしの対たいの端に、わずかに雨露をしのぎながら、女はそれでもじつと何物かを待ち続けていた。

最後まで残っていた幼い童もとうとう何処かに去ってしまった跡には、もう一方の崩れ残りの東の対の一角に、この頃田舎から上ってきた年老いた尼が一人、ほかに往くところもないらしく、棲すみついていていた。それは昔この屋形で使われていた召使いの縁者

だった。そうしてその尼は此の女をかわいそうに思つて、ときどき余所よそから貰つてくる菓子や食物などを持つて来てくれた。しかしこの頃はもう女にはその日のことにも事を欠くことが多くなり出していた。——それでもなお女はそこを離れずに、何物かを待ち続けているのを止めなかつた。

「あの方さえお為しあわ合せになつていて下されば、わたくしは此の儘まま朽くちてもいい。」

そう思うことの出来た女は、かならずしも、まだ不為合せではなかつた。

男にとっては、その一二年の月日はまたたく間に過ぎた。

しかしその間、男は一日も前の妻のことを忘れたことはなかった。が、何かと宮仕が忙しかった上、あらたに通い出していた伊予の守よの女かみの家で、懇ろに世話をせられていると、心のまめやかな男だっただけ、彼等を裏切らないためにも、男はつとめて前の妻のところからは遠ざかり、胸のうちでは気にかけてながらも、音信さえ絶やしていた。

最初のうちは、それでも男は幾たびか、人目に立たないようにならざと日の暮を選んで、前の女のいる西の京の方へ行きかけた。が、朝夕通いなれた小路に近づいて来ると、急に何物かに阻こぼまれるような心もちで、男はその儘引返して来た。男はこんなことで、心にもなく女とも別れなければならなくなる運命を考えた。

しかし、その儘女にも逢わずに月日が立つにつれ、もう忘れていてもいいはずのその女のことを何かのはずみに思い出すと、その女の、袖を顔にした、さびしい、俯伏うつぶした姿が前にも増して鮮明に胸に浮んで来てならなかった。そうしてとうとうしまいには、その女のそうしているときの息づかいや、やさしい衣きぬずれの音までがまざまざと蘇よみがえるようになり出した。

その春も末にちかい、或日の暮れがた、男はどうとう女恋しさにいてもたってもいられなくなつたように、思い切つて西の京の方へ出かけて往つた。

其処いらは小路の両側の、築土も崩れがちで、蓬よもぎのはびこつた、人の住まっていない破れ家の多いようなところだつた。漸ようやく以前

通いなれた女の家のあたりまで来て見ると、倒れかかった門には
葎の若葉がしげり、藪やぶには山吹らしいものがしどろに咲きみだれ
ていた。

「こんなに荒れているようでは、もう誰もここにはいまい。」男
は心のなかでそう考えた。

おそらくその女も他の男に見いだされて余所に引きとられてし
まったのだらうと詮あきらめると、その女恋しさを一ひとしお層切に感じ出し
ながら、その儘では何か立ち去りがたいように、男はなおあたり
を歩いていった。すると、築土のくずれが、一とこころ、童でもふみ
あけたのか、人の通れるほどになっていた。男は何の気なしに其
処からはいつて見ると、もとは何本もあつた大きな松の木は大て

い伐り倒されて、いまは草ばかりが生い茂っていた。古池のまわりには、一めんに山吹が咲きみだれてい、そのずっと向うの半ば傾いた西の対の上にちようど夕月のかかっているのが、男にははじめてそれと認められた。その対の屋の方は真つ暗で、人気はないらしかつた。それでも男はそちらに向つて女の名を呼んで見た。勿論、なんの返事もなかつた。そうなると男は女恋しさをいよいよ切に感じ出し、袖にかかる蜘蛛くもの網いを払いながら、山吹の茂みのなかを掻き分けていった。男はもう一度空しく女の名を呼んだ。男はそのとき思いがけず反対の側にある対の屋からかすかな灯の洩れているのを見つけた。男は胸を刺されるような思いをしながら、そちらの方へさらに草を掻き分けて往つて、最後に女の名を

呼んだ。返事のないのは前と変りはなかった。男は草の中から其処には一人の尼かなんぞいるらしいけはいを確かめると、頭を垂れた儘、もと来た道をあとへ引つ返した。もう昔の女には逢われないのだと詮め切ると、それまで男の胸を苦しいほど充たしていた女恋しきは、突然、いい知れず昔なつかしいような、殆ど快いもの思いに変わりだした。……

なかば傾いた西の対の、破れかかった妻戸つまどのかげに、その夕べも、女は昼間から空にほのかにかかっていた織い月ほそをぼんやり眺めていたうちに、いつか暗やみにまぎれながら殆どあるかないかに臥せていた。

そのうちに女は不意といぶかしそうに身を起した。何処やらで自分の名が呼ばれたような気がした。女の心はすこしも驚かされなかつた。それはこれまでも幾たびか空耳にきいた男の声だつた。そうしてそのときもそれは自分の心の迷いだとおもつた。が、それからしばらくその儘じつと身を起していると、こんどは空耳とは信ぜられないほどはつきりと同じ声がした。女は急に手足が竦すくむように覺えた。そうして女は殆どわれを忘れて、いそいで自分の小さな体を色の褪さめた蘇すおう芳の衣のなかに隠かつたのが漸やつとこのどつた。女には自分が見るかげもなく瘦やせさらばえて、あさましいような姿になっているのがそのとき初めて気がついたように見えた。たとい気がついていたにせよ、そのときまでは殆ど気に

もならなかった、自分のそういうみじめな姿が、そんなになつてまだ自分の待つていた男に見られることが急に空怖ろしくなつたのだつた。そうして女は何も返事をしようとはせず、ただもう息をつめていることしか出来なくなつて自分の運命を、われながらせつなく思うばかりだつた。それからまだしばらく池のほとりて草の中を人の歩きまわつてゐる物音が聞えていた。最後に男の聲がしたときは、もう女のゐる対の屋からは遠のいて、向いの尼のゐる対の屋の方へ近づき出しているらしかつた。それからもう何んの物音もしなくなつた。

すべては失われてしまつたのだ。男は其処にいた。其処にいたことはたしかだ。それを女にたしかめでもするようになつて、男の歩み

去つた山吹の茂みの上には、まだ蜘蛛の網が破れたままいくすじか垂れさがつて夕月に光つて見えた。女はその儘荒らな板敷のうえにいつまでも泣き伏していた。……

三

それから半年ばかり立つた。

近江の国から、或郡司ぐんじの息子が宿直とのいのために京に上つて来て、そのおばにあたる尼のもとに泊ることになったのは、ちようど秋の末のことだった。

それから何日かの後、郡司の息子が異様に目を赫かがやかせながら

言つた。「きのうの夕方、向うの壊れ残りの寝殿に焚たきものを捜しに往きますと、西の対にちようど夕日が一ぱいさし込んでいて、破れた簾すだれごしにまだ若そうな女のひとが一人、いかにも物思わしげに臥せているのがくつきりと見えましたので、私はおどろいてその儘まま帰つて来てしまいました。あれはどなたなのですか。」

尼は当惑そうに、しかしもう見つけられてしまつては為方しかたがないように、その女の不為合せな境涯を話してきかせた。郡司ぐんじの息子はさも同情に堪えないように、最後まで熱心に聞いていた。

「そのお方にぜひとも逢わせて下さい。」息子は再び目を異様に赫かがやかせながら、田舎者らしい率直さで言つた。「そのお方のほうでもその気になつて下されば、わたしが国へ帰るとき一緒にお

伴れして、もうそのようなお心細い目には逢わせませんから。」

尼は、それを聞くと、まあこんな自分の甥ごときものかと思ひながら、それでも彼の言うように女も一そそんな気もちにでもなつた方が行末のためにもなるのではないかと考えもした。

尼はいくぶん躡ちゅうちよ躡ちゅうちよしながらも、何時かその甥の申出を女に伝えることを諾うべなわな^{うべな}いわけにはいかなかつた。

或野のわき分立つた朝、尼はその女のもとに菓子などを持って来ながら、いつものように色の腿さめた衣をかついだ女を前にして、何か慰めるように、

「あなた様もどうして此の儘でいつまでも居られましょう」と言

いだした。「こんなことはわたくしとしては申し上げ悪いこと
 ですけど、いまわたくしの所に近江からいささか由縁ゆかりのあります
 ものの御子息が上京せられて来ておられますが、そのものがあな
 た様のお身の上を知って、ぜひとも国へお伴れしたいと熱心にお
 言いになって居りますけれど、いかがでございましょうか、一そ
 そのもののお言葉に従いましては。此の儘こうして入らつしやい
 ますよりは、少しはましかと存じますが。」

女はそれには何にも返事をしないで、空しい目を上げて、とき
 おり風に乱れている花はな薄はなすすきの上にちぎれちぎれに漂っている雲
 のたたずまいを何か気にするように眺めやっていたが、急に「そ
 うだ、わたくしはもうあの方には逢われないのだ」とそんなあら

ぬ思いを誘われて、突然そこに俯伏うつぶしてしまった。

夜なかなどに、ときおり郡司の息子が弓などを手にして、女の住んでいる対たいの屋やのあたりを犬などに吠ほえられながら何時までもさまようようになったのは、そんな事があつてからのことだった。夜もすがら、木がらしが萩や薄などをさびしい音を立てさせていた。どうかすると、ひとしきり時雨しぐれの過ぎる音がそれに交じつて聞えたりした。そうでなければ、郡司の息子が、ときどき自分の怖ろしさを紛まぎらせようとするのか、あちこちと草の中を歩きまわっていた。……

そんな夜毎に、女は妻戸をしめ切つて、ともし火もつけず、身の置きどころもないかのように、色の腿めた衣をかついだまま、

奥のほうにじつとうずくまっていた。かくも荒れはてた棲み家は、奥ぶかくなどにじつとしていると、その儘何かの物のけにでも引つ張り込まれていつてしまいそうな気がされて、女は怯え切り、殆ど寐ねられずに過あごすことが多いのだった。

或ましぐれた夕方、尼は女のところに来ると、いつものように沁しみみ々みと話し込んでいた。「ほんとうにいつまで昔のままのお気もちでいらつしやるのでございましょう。」尼はことさらに歎息するように言った。「それは今のようになでもして居られますうちはまだしも、此のわたくしでも若もしもの事がございましたら、どうなさるお積りなのですか。しかし、やがてそういうときの来ることは分かっています。」

女は数日まえのことを思い出した。——数日まえ、尼にその話をはじめて切り出されたとき、突然はつとして「自分はもうあのお方には逢われないのだ」と気づいたときのいまにも胸の裂けそうな思いのしたことを思い出した。あのときから女の心もちは急に弱くなった。それまでのすべての気強さは——ひっきよう畢 竟、それはいつかは男に逢えると思つての上での気強さであつた。——女はもう以前の女ではなかつた。

その晩、尼は郡司の息子をその女のもとへ忍ばせてやった。

それから夜毎に郡司の息子は女のもとへ通い出した。

女はもう詮せんかた方たつ尽きたもののように、そんなものにまですべて

をまかせるほかなくなつた自分の身が、何だかいとおしくていとおしくてならないような、いかにも悔くやしい思いをしながら、その男に逢いつづけていた。

ようや漸く任が果てて、その冬のはじめに近江へ帰らなければならなくなつたときには、郡司の息子はもうすっかり此の女に睦むつんで、どうしてもその儘女を置きざりにして往く気にはなれずにとまつた。

女はそれを強いられる儘に、京を離れるのはいかにもつらかつたけれど、しかし自分の余りにもつたなかつた来しかたに抗あがうような、そうして何か自分の運を試めしてみるような心もちにもなりながら、その郡司の息子について近江に下つていった。

四

しかしその郡司の息子には、国元には、二三年前にめとつた妻が残してあつた。そうして親達の手まえもあり、息子は、その京の女をおもてむき婢はしためとして伴れ戻らなければならなかつた。

「そのうちまた、わたくしは京に上るはずです。」息子は女を宥なだめるようにして言った。「その折にはきつと妻として伴れて往きますから、それまで辛抱していて下さい。」

女はそんな事情を知ると、胸が裂けるかと思うほど、泣いて、泣いて、泣き通した。——すべての運命がそこにうち挫くじかれた。

が、一月たち二月たちしているうちに、——殆ど誰にも氣どられずに婢として仕えているうちに、——こうしている現在の自分がその儘でまるきり自分にも見ず知らずのものでもあるかのような、空虚うつろな気もちのする日々が過ぎされた。いままでの不為合せな来しかたが自分にさえ忘れ去られてしまっているような、——そうして、そこには、自分が横切ってきた境涯だけが、野分のあとの、うら枯れた、見どころのない、曠野あらののようにしらじらと残っているばかりであった。「いつそもうこうして婢として誰にも知られずに一生を終えたい」——女はいつかそうも考えるようになった。

此処に、女は、まったく不為合せなものとなった。

山一つ隔てただけで、こちらは、梢にひびく木がらしの音も京よりは思いのほかにはげしかつた。夜もすがら、みずうみの上を啼^なき渡つてゆく雁もまた、女にとっては、夜々をいよいよ寢覚めがちなものとならせた。

それから数年後の、或年の秋、その近江の国にあたらしい国守が赴任して来て、国中が何かときわぎ立っていた。

国内の巡視に出た近江の守の一行が、方々まわつて歩いて、その郡司の館のある湖にちかい村にかかったときは、ちようど冬の初で、比良^{ひら}の山にはもう雪のすこし見え出した頃だった。

その日の夕ぐれ、丘の上にあるその館では、守^{かみ}は郡司たちを相

手にして酒を酌みかわしていた。

館のうえには時おり千鳥のよびかう声が鋭く短くきこえた。――すっかり葉の落ち尽した柿の木の向うには、かれあし枯蘆のかなたに、まだほの明るいみずうみの上がひっそりと眺められた。

かみ守は、すこしびくん微醺を帯びたまま、ぐんじ郡司が雪深いこし越に下っている息子の自慢話などをしているのをききながら、おしき折敷や菓子などを運んでくる男女のげす下衆たちのなかに、一人の小がらな女に目をとめて、それへじつと熱心な眼ざしをそそいでいた。他のはしため婢と同様に、髪は巻きあげ、衣も粗末なのをまとつてはいたが、その女は何処やら由緒ありそうに、いかにも哀れげに見えた。その女をはじめて見たときから、守の心はふしぎに動いた。

宴の果てる頃、守は一人の小舎人童ことねりわらわを近くに呼ぶと、何かこつそりと耳打ちをした。

その夜遅く、京の女は郡司のもとに招ぜられた。郡司は女に一枚の小桂こうちぎを与えて、髪なども梳すいて、よく化粧してくるようと言いつけた。女は何んのことか分からなかったが、命ぜられたとおりの事をして、再び郡司の前に出ていった。

郡司はその女の小桂姿を見ると、傍らの妻をかえりみながら、機嫌好きそうに言った。「さすがは京の女じゃ。化粧させると、見まちがうほど美しゆうなつた。」

それから女は郡司に客舎の方へ伴つれて往かれた。女は漸やつと事

情が分つて来ても、押し黙つて、郡司のあとについてゆきながら、何か或強い力に引きずられて往きでもしているような空虚な自分をしか見出せなかつた。

守の前に出されると、ほのぐらい火影ほかげに背を向けた儘まま、女は顔に袖を押しつけるようにしてうずくまつた。

「おまえは京だそうだな。」守はそこに小さくなっている女のうしろ姿を気の毒そうに見やりながら、いたわるように問うた。

「……………」女はしかし何とも答えなかつた。

そうして女は数年まえのことを思い出した。——数年まえには、田舎上りの見ず知らずの男に身をまかせて京を離れなければならなかつた自分が自分でもかわいそうでかわいそうでならなかつた。

そうしてそのときは相手の男なんぞはいくらでもさげすめられたが、こんどと云うこんどは、その相手がかえつて立派そうなお方であるだけに、そういう相手のいいなりになろうとしている自分が何だか自分でもさげすまずにはいられないような———そうしていくら相手のお方にさげすまれても為方しかたのないような———無性にさびしい気もちがするばかりだった。女にしてみると、こうして見出されるよりは、いままでのように誰にも気づかれずに婢ことしてはかなく埋もれていた方がどんなに益ましか知れなかった。……

「己おれはおまえを何処かで見たようなふしぎな気がしてならない。」

男はもの静かに言った。

女は相変らず袖を顔にしたぎり、何んといわれようとも、ものう懶だげ

に顔を振っているばかりだった。

館のそとには、時おりみずうみの波の音が忍びやかにきこえていた。

そのあくる夜も、女は守のまえに呼ばれると、いよいよ身の置きどころもないように、いかにもかぼそげに、袖を顔にしながら其処にうずくまっていた。女は相変らず一ことも物を言わなかった。

夜もすがら、木がらしめいた風が裏山をめぐるっていた。その風がやむと、みずうみの波の音がゆうべよりかずつとはつきりと聞えてきた。おりおり遠くで千鳥らしい声がそれに交じることもある。

る。守はいたわるように女をかきよせながら、そんなさびしい風の音などをきいているうちに、なぜか、ふと自分がまだ若くて兵ひ衛え佐さだだつた頃けいに夜毎に通つていた或女のおもかげを鮮かに胸むねのうちに浮べた。男は急に胸騒ぎがした。

「いや、己の心の迷いだ。」男はその胸の静まるのを待つていた。突然、男の顔から涙がとめどなくながれて女の髪に伝わった。女はそれに気がつくつと、いかにも不審に堪えないように、小さな顔をはじめて男のほうへ上げた。

男は女とおもわず目を合わせると、急に気でも狂つたように、女を抱きすくめた。「矢張りおまえだつたのか。」

女はそれを聞いたとき、何やらかすかに叫んで、男の腕からの

がれようとした。力のかぎりのがれようとした。「己だと云うことが分かったか。」男は女をしっかりと抱きしめた儘、声を顫ふるわせて言った。

女は衣きぬずれの音を立てながら、なおも必死にのがれようとした。が、急に何か叫んだきり、男に体を預けてしまった。

男は慌てて女を抱き起した。しかし、女の手に触れると、男は一層慌てずにはいられなかった。

「しっかりしていてくれ。」男は女の背を撫でながら、漸つといま自分に返されたこの女、——この女ほど自分に近い、これほど貴重だいじなものはいないのだということがはつきりと身にしみて分かった。——そうしてこの不為合せな女、前の夫を行きずりの男

だと思ひ込んで行きずりの男に身をまかせると同じような詮^{あき}らめ
で身をまかせていたこの惨めな女、この女こそこの世で自分のめ
ぐりあうことの出来た唯一の為合せであることをはじめて悟つた
のだった。

しかし女は苦しそうに男に抱かれたまま、一度だけ目を大きく
見ひらいて男の顔をいぶかしそうに見つめたぎり、だんだん死顔
に変わりだしていた。……

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第6巻」小学館

1988（昭和63）年6月1日初版第1刷発行

底本の親本：「堀辰雄全集 第二巻」筑摩書房

1977（昭和52）年8月30日初版第1刷発行

初出：「改造」

1941（昭和16）年12月号

初収単行本：「曠野」養徳社

1944（昭和19）年9月20日

※底本の親本の筑摩全集版は、養徳社版による。初出情報は、

「堀辰雄全集 第二巻」筑摩書房、1977（昭和52）年8月30日、
解題による。

入力：kompass

校正：門田裕志

2003年12月29日作成

2012年4月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

曠野

堀辰雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>